

Vol.01
2026

JICA海外協力隊応援基金

NEWSLETTER

JICA
海外協力隊



あなたの応援が、
次の挑戦を支えています。

隊員活動支援事例

写真：消火訓練で干場さんが子どもたちに消火器の使い方を教える様子です。的へ水がうまく当たると歓声が上がりました。

バヌアツの学校防災教育を支援

JICA海外協力隊応援基金の活用事例として、バヌアツで活動する協力隊員・干場圭（ほしば けい）さんへの取り組みを紹介します。

干場さんは2024年2月、バヌアツの首都ポートビラにある教育訓練省に赴任し、学校防災教育の推進に携わりました。自然災害の多いバヌアツで活動する中で、赴任から約10か月後には大地震が発生し、災害時支援にも従事したことで、防災教育の重要性を改めて実感したといいます。そこで干場さんが着目したのが、水を充填して繰り返し使用できる訓練用水消火器です。実際に操作しながら学べる機会があれば、生徒や教員が消火器の正しい使い方を身につけることができると考えました。（2ページへ続く）

隊員活動支援事例

バヌアツ



干場 圭さん
2023年度第3次/防災・災害対策

応援基金に感謝しています！

(1ページから続く)しかし、バヌアツでは訓練用水消火器を手することが難しかったため、日本から調達する方法を検討し、応援基金への申請に至りました。

基金による支援を受け、訓練用水消火器2本と放水訓練用の的を組み合わせた「消火器セット」を購入・輸送。到着後はさっそく同僚へ使用方法を指導するとともに、学校で実施する防災教育に消火訓練を取り入れました。訓練に参加した小中学生や教員は、実際に消火器を操作しながら楽しんで学び、実践的な防災スキルを身につけています。

その後、干場さんは首都圏だけでなく、離島やへき地を含む40校以上を訪問し、消火訓練の普及に取り組みました。応援基金による支援は、防災教育の充実と地域の防災力向上に大きく貢献しています。

「消火器の正しい使い方を知ることは、バヌアツ全体の防災力向上に繋がります。応援基金のおかげで、消火訓練が私の帰国後も継続してできる道筋が付き、感謝しています。」



訓練用水消火器の到着を喜ぶ、職場の同僚たちと干場隊員

ルワンダ

水ろ過機設置で安全な水を提供

安全な飲料水へのアクセスが改善され、シングルマザーやその子どもたちに加え、経済的に困難な人々も利用できるようになりました。住民の健康と生活の質の向上に大きく貢献しています。



末川 雄志さん/2023年度2次隊/コミュニティ開発

ニカラグア

新生児の命を守る支援

超低出生体重児モデル2体の寄贈により、医師・看護師の実践的な研修が可能となりました。新生児蘇生の技術向上が進み、より多くの小さな命を守る取り組みに貢献しています。



荻 昌子さん/2023年度3次隊/助産師

寄附者インタビュー

「会社としての利益を、次世代と社会のために還元したい」

まだ創業4年目の小さな会社ではありますが、都内の大規模プロジェクトの建設現場で電気工事を請け負っています。そこで得た利益をまず社員に還元し、そのうえで地域や社会にも役立てたいとの思いから、JICA海外協力隊応援基金へ寄附しました。姉が海外協力隊員としてアフリカで活動した経験があり、現在もJICA関連機関に勤務していることから、私自身にとって安心感と信頼感のある寄附先です。そのため、託した寄附金を有効に活用していただけたと考えました。寄附の原点は、若い頃に行った赤い羽根共同募金です。当時から自然な気持ちで寄附に参加しており、その思いは今も変わっていません。これからも社会への感謝の気持ちを込めて、継続して寄附を続けていきたいと考えています。

「感謝の集い」で表彰を受けた寄附者の皆様に、お話を伺いました

株式会社ゼネット代表取締役 四元一弘 さん



イノウエヨシオ さん

ゼネットは、創業以来CSRを経営の軸に据え、JICAとの連携を通じて、フィリピン等の大学に社員を派遣し、IT教育・技術支援に取り組んでまいりました。JICA海外協力隊や専門家派遣を通じて培われる経験は、人材育成と国際協力の大きな力です。JICAの皆様活動に深く敬意を表し、今後も共に持続可能な未来づくりを応援してまいります。帰国隊員が任国への貢献として起業される際に寄附を活用頂けると幸いです。



JICA海外協力隊は60周年を越えて、累計で約100か国のべ6万人にも及ぶ日本と世界のかけ橋となってきた意義ある取り組みが綿綿とした系譜を続けてられています。現地貢献をしたいけれども中々、難しい中でこうして日本に居ながらにして、応援ができ、またこうして現地での使い道の実際を伺って、本当に「寄附してよかった」と思いました。「頑張れ!」の想いを込めて、寄附を贈っていききたいと思います。



株式会社R4
代表取締役 五反田健太 さん

応援基金への 寄附事例

中学生の“なんとかしたい” 思いが応援基金に

「協力隊員の活動を応援したい」と長野県駒ヶ根市の市立赤穂中学校の生徒たちが応援基金へ寄附を託しました。3年生の9人は「自立」をテーマにした探究学習の一環として、自分たちの手で畑を作るところから始め「福耳唐辛子」を栽培して、出来上がったものから「唐辛子味噌」に加工して、完成品を校内で販売しました。

得られた売り上げの使い道について自分たちで考え、自ら出した答えが「JICAの応援基金へ寄附すること」でした。「ぜひ自分たちで手渡したい」とみんなで地元にあるJICA駒ヶ根へ赴き、寄附を託してくれました。

2024年度3年生担任
加藤博美さん(当時の役職)
「苦勞して稼いだお金が、
世界に派遣され活躍する
方々の役に立てばうれしいです。」



“隊員めし”とは？

JICA海外協力隊応援メニューのことで、協力隊員が赴任先で実際に食べている食事を再現しています。価格(一例として750円)のうち、約20円が「協力隊応援基金」へ自動的に寄附されます。(JICA東京 食堂「Oasis」東京ビジネスサービス株式会社運営)



ブラジル
ブラジル風チキンストロガノフ



モロッコ
ハリラスープ

トピックス



11/13

JICA海外協力隊は、2025年に発足60周年を迎え、天皇陛下のご臨席を賜り、記念式典が行われました。



4/18

これまでの寄附者の皆さんに集ってもらい「感謝の集い」を実施しました。

2025年

2026年

2/25

JICA東京食堂にて「隊員めし」が開始されました。

9/12

応援基金を活用した「訓練用水消火器を用いた防災教育」に関する記事が「世界日記」で報告されました。

12/16

国際協力に想いを託す「相続・遺贈セミナー」開催しました。



寄附金のご報告

皆様から多くの志をお寄せいただきました。心より御礼申し上げます。

寄附金受入合計
(2026年3月末時点)

4,929,010 円

寄附金受入実績等
(2026年3月末時点)

個人
法人・団体
合計

280 人 **3,099,000** 円
15 件 **1,830,010** 円
295 件 **4,929,010** 円

これからの日本社会にはJICA海外協力隊が必要です

これからの日本では人口減の中で多文化共生の社会づくりがますます重要になります。その中で、発足から世界と日本の「かけはし」となる人材を育ててきたJICA海外協力隊の今後の役割はますます増してくると思います。応援基金は、開発途上国で活動している現役隊員、帰国後に国内外で社会課題の解決に取り組む隊員OBOG、その他JICAボランティア事業に関わる取り組みをご寄附で応援いただくものです。これまでの数多くの方々からご寄附をいただいたことに深く感謝申し上げますと共に、平和で豊かな世界の実現を目指して、更に多くの皆様のご支援をお待ちいたしております。



大塚 卓哉

独立行政法人国際協力機構（JICA）
青年海外協力隊事務局長

みなさまのご寄附が協力隊の歩みを未来へつなぐ力となります

JICA海外協力隊応援基金のミッション

開発途上国の人々とともに **笑** い、
ともに **汗** と **涙** を流し、
課題にぶつかっていった経験を通じて、
世界と日本の「**かけはし**」となる日本人を育成し、
平和で豊かな 世界と日本の実現を目指します。



JICA海外協力隊応援基金
HPはこちら▼



JICA海外協力隊応援基金

遺贈寄附とは？

亡くなった後に、残った財産の一部または全部を寄附する方法です。ご自身が遺言によって寄附すること（遺贈）や、相続人が相続財産から寄附することなどを総称して「遺贈寄附」と呼びます。

遺贈寄附の現状

遺贈寄附に肯定的な人

44.8%

【出展】『寄付白書2025』日本ファンドレイジング協会

遺贈によるご寄附について

遺贈寄附を検討されている方はJICAが提携している金融機関を通じて専門的なサポートを受けながら、安心して備えを進めていくことができます。



様々な支援方法

「JICA海外協力隊応援基金」へは、クレジットカード、ゆうちょ銀行払込票などによるご支援が可能です。



1. 今回のみのご寄附
2. 定期的なご寄附（毎月）

※「決済月」を毎月にするだけで、
忘れることなく毎月継続してご支援いただけます

独立行政法人国際協力機構（JICA）
寄附金事務局

お問い合わせ先

0800-100-5931

（フリーコール：平日10:00～12:30・13:30～17:00）



問い合わせフォーム

発行日：2026年7月23日

《編集後記》

「感謝の集い」第2部の「交流会」へ参加、帰国した隊員を囲んで寄附者や関係者が少人数でテーブルを囲みました。

当日のテーブルを飾っておもてなしするために「歓談のお供」として帰国隊員が携わるハーブティやお花、はちみつなどが用意されて、文字通り、花を添えていました。

隊員との直接の意見交換や、応援基金の取り組みに対する率直なご意見をいただきました。中には複数回隊員として参加された方や、現役隊員のご家族などが参加されていて、寄附に込めた思いや、今後期待する支援のあり方など、穏やかな雰囲気の中、活発な意見交換が行われました。

ご参加いただいた皆さまからは、「具体的な活動内容を知ることができた」「協力隊や応援基金をより身近に感じる事ができた」との声をいただきました。また参加者同士の相互交流も大いに進んだ様子でした。

参加していただいた方々にとって、大変意義深い時間となると同時に、今後も協力隊の活動を身近に感じたいだけのような取り組みを進めていきたいと思っています。